
孟達

風唄

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孟達

【Nコード】

N9503A

【作者名】

風唄

【あらすじ】

何故こうなったのか、城の周りは敵軍に包囲されている、俺は何を間違ったのだろうか、三国志の時代の武将、孟達（子慶）にスポットを当てた小説です（土台は正史ではなく演義です）

何故こんなことになったのか、

俺の居る新城の周りは敵軍、魏の軍に囲まれている、

旗印は司馬、

知将司馬懿その人だ、

敵将が城に向かってなにかを叫ぶ、

あれは確か… 名将徐晃…

敵陣に隙は無い、

それに比べ我が軍に戦の準備は出来ておらず

攻めても、勝機はなく、逃げようにも、隙はなく、守っても、守り切れるはずもなく、援軍も無い、

俺は、ここで死を悟った、一人の猛将も百の兵にはかなわない、

ましてや、敵軍を率いるのは知将…

何故、このような事態になってしまったのだろうか、

事態は…もう、何年前まで遡るだろうか、

あの頃私は、君主様の義理の息子の劉封殿の下、上庸の守備についていた…

反乱を鎮めたり、兵を鍛練したり、忙しいながらも、充実した日々であった―

しかし、あの時から全てが狂い始めた、

…東の名将、関羽殿が敵軍を攻めたのだ、途中まではうまくいった、

猛将、ホウ徳を斬り、名将、于禁を捕らえ、敵城を落とす寸前までいったのだが…

後方より攻め寄せた別の国の敵軍に侵攻を受け、部下の裏切りにもあい、窮地にさらされたのだ、

関羽殿は連戦連敗し、とある古城に立て籠もった、兵力差はいかんともしがたく、落城は目の前だった、

そんな時、関羽殿から、救援依頼を持った、関羽殿配下の将、廖化殿が来た、

彼は劉封殿にあい、救援を依頼した、

劉封殿は兵を出そうとしたが、俺は劉封殿を止めた、

私は軍の兵は僅かに3000程、対する敵軍は数万…

勝ち目は無い、ここで攻めては、上庸まで危なくなる、

ここが取られると、本国まで危なくなるのだ、

俺は劉封殿にこの地の大切さ、兵を出す無意味さを説き、この地を固めるように進言した、

劉封殿はなおも迷っていたみたいだが、遂に折れた、

廖化殿は喰い下がったが、彼を説得した、彼は納得できない様子であつたが、無駄だと判断したのか、馬を駆け、本国まで救援に向かつていった、

俺は、これで良かったのだ、と、自分に言い聞かせた、

そして…関羽殿は捕らえられ、打ち首になったという話が…伝わって来た…

そして、暫く時が過ぎたある日、劉封殿が綿竹という場所に移駐を命じられた、

それ自体を不信には思わなかった、移駐は問題なく終わりだったが、ある人から、衝撃の事実を聞かされる、

君主の劉備様が俺を殺そうとしているのだと、

理由は明らかだった、

援軍を出さなかったからだ、

何たることだ！

劉備様が…

しかし、考えて見れば無理も無いことなのかもしれない、

関羽殿は劉備殿の義兄弟、

弟を見捨てたとなると…

しかし、あの時仕方が無かったのだ！

俺は誰に言うでもなく、叫んだ、力の限り叫んだ！

しかし、いくら叫ぼうとも、劉備様の考えが変わることはなく、俺の運命が変わるわけでも無い、

俺は悩んだ、

…俺は、敵国である魏に降伏した、

自分の支配下にあつた土地を手土産に、

もう…こうするしか無かつたのだ…

こうするしか……

そんなある日…既に敵国となつたかつての祖国、蜀の国から劉封殿…いや、劉封が攻めて来た、

俺の名を叫びながら、

近隣の村々を荒らした、

やむなく俺は出撃する、手に矛を持ち、腰に弓を提げ、劉封軍と対峙する、

劉封が俺に叫んだ…なにかを叫んだ、

なにかは、俺には聞こえなかったが、俺を罵倒しているのだろう、

彼は頭に血が上っていたのか、真っ直ぐに突っ込んで来た、

…俺は彼に応じるかのように、真っ直ぐ突っ込んだ、

何も考えず、ただただ、真っ直ぐ、

劉封軍は弱かった、彼は…とても名将と呼べる器では無い、

そこに、後方から味方の夏侯尚軍と徐晃軍が現れた、
どうやら、戦に気付き救援に来たのだろう、

俺はうつとうしく思いながらも、彼等の援軍を追い返すことも出来ず、このまま、劉封軍を徹底的に叩き潰した、

翌日も、また翌日も、彼は兵を纏め挑んで来た、

その度に、俺は彼を叩き潰した、

そして、俺は彼に使者を送った、二人送った、降伏するよう、手紙を添えて、

しかし、一人しか使者は帰らなかった、

使者が言うには、彼は烈火の如く怒り、

「先には義叔父の情義を誤らせ、今度は親子の間を裂こうと言うのか」
と叫び、

手紙を引き裂き、使者を切り捨てたと言う、

彼は…悲しいくらいに真つ直ぐだった…

だから俺は、彼に対する礼儀として、彼の軍を叩きのめし、彼を本国まで撤退させた、

後に、彼が劉備に斬られたと言う話が風の噂で聞こえて来た……

そして、時は過ぎた……

蜀では劉備は没し、息子の劉禅が劉備の跡を継ぎ、
最高位である丞相にはかの諸葛亮（孔明）がついた、

そして彼、諸葛亮は今亡き先主、劉備の意思を継ぎ、魏国に対し
所謂、北伐を開始した、

何度か北伐を行うものも、国力差はいかんともしがたく……

その時俺は決心した、

祖国、蜀に帰ろうと！

今ならば、劉備様もおらず、殺されることもないだろうと…

飢餓のため、益州（蜀）に移住し、長らく過ごした蜀の地…

俺は…望郷の念に捕われていたのかも知れない…

俺は思い立ったら、すぐに行動した、

まず、友人であつた李嚴の息子、永安の李豊に手紙を出し、丞相から了解を受け、

上庸太守申耽を誘い、挙兵の準備をした、

しかし、俺の読みは甘かった、

何者かが司馬懿に情報を流した、

司馬懿は新城に急行し、我が軍は包囲されてしまった…

外では相変わらず、徐晃が叫んでいる、

俺は、弓を取り出し、

徐晃にわけのわからない言葉を叫び返ししながら、彼を一矢で射殺した、

敵軍は動揺したらしく、この隙について、蜀まで逃亡しようと、軍勢を揃えようとしたが、

城内から鬨声がする、

その声は次第に大きく、なった、

兵が一人、

「報告」

と叫んで現れた、背中には矢が刺さっている、

しかし、彼の報告を聞く前に状況は理解できた、

後ろから、弓を持った申耽が現れた、

俺は…

裏切られたのだ…

兵の背中に、もう一本、矢が突き刺さる、

俺は無我夢中で腰の剣を抜き、彼の名を叫びながら、彼に切り掛かっていった、

体中に何か突き刺す感覚がある、

そして、俺の刃はやつに届くことはなく…

俺の生涯は幕を閉じた…

（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます（――）m盛り
上がりにかけますが…気にしないでください（^^ゞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9503a/>

孟達

2010年10月13日03時47分発行